

「わたしはある」という言葉は日本語としてわかりにくい言葉ですが、英語では”I am”です。また、この福音書の他の個所には「わたしは〇〇である」という表現が出て来ます。この「わたしは〇〇である」という言い方はこの福音書独特の言い方と言っても良く、全部で7カ所あります。「わたしは命のパンである」、「わたしは世の光である」、「わたしは門である」、「わたしは良い羊飼いです」、「わたしは復活であり、命である」、「わたしは道であり、真理であり、命である」、「わたしはまことのぶどうの木」と記されています。これらの言い方は、それぞれニュアンスや強調点は違いますが、どれもイエスがイエスを信じる人に命を与える方であることを示しています。「わたしはある」という言葉は出 3:13~14 に由来します。この言葉の意味は、「天地が造られる前からわたしはおり、今もおり、これから後も天地が滅びるまでずっとあり続ける」ということであり、また、「わたしは全てのもを造り出す者だ」ということとも考えられます。さらに、29 節のように、「わたしはどんな時にも、どんな状況の中でも、あなたと共にいる」という意味でもあると思われれます。イエスが「わたしはある」と言ったと記すことにより、「イエスはあのモーセが出合った神さまと一つであり、イエスは神さまと共にずっとあり続ける者であり、あなたがたとずっと共にある者なのだ。」と著者は語るのです。また、28 節には、「人はイエスを十字架に架けた時に初めて、イエスが『わたしはある』という方であることが分かる」と記しています。イエスは素晴らしいことを言い、イエスの力はすごい。そのようにイエスを受け止める時、人は自分の中の基準に照らして、イエスの言葉や業を素晴らしいと言っているのではないのでしょうか。このような受け止め方ですと、イエスと出合ってもその人は少しも変わりません。そのような人にとって、イエスは師であるかもしれませんが、自分の人生のすべてを委ね、共に歩む主ではないのです。イエスが私たちに求めているのは、イエスを「わたしはある」という方として、神さまと一つでいる神の独り子として信頼し、自らを委ね、共に歩むことです。それは、私たちの根源的な罪のために、私たちに代わって十字架に架り、今も私たちと共に生きているイエス・キリストと出会う時にしか私たちの中に生じることのない出来事なのではないのでしょうか。私たちが毎月一回行っている聖餐式は、まさしく「わたしはある」という方が今も私たちと共にいるというしるしです。パンと共に、イエス・キリストは確かに今も私たち共におり、杯と共に、イエス・キリストは臨在しています。